

四度目の誕生

校長 萩原 哲哉

この三月で、定年退職いたします。

ここ片柳の地は、学生上がりの私が、初めて教壇に立った地であるとともに、今また、その職を去る場所にもなりました。当時御縁をいただいた方々も立派になられ、中には現在、保護者として更なる御縁をいただけた方もいらっしゃると思います。若くして逝かれた方々の報を伺うこともあり、正直いたたまれない気持ちになる折もありましたが、自分自身が現在生かかせていただいていることに気持ちを奮い立たせ、日々過ごして参りました。

表題とした「四度目の誕生」とは、満四歳のことではありません。心理学で「退職」のことを、こう言い表すそうです。一回目はもちろん、この世に生を受けた時。二回目は自我が芽生えた、いわゆる「物心がついた」時、三回目が成人です。

これまで「定年(退職)」というと、社会の表舞台から去っていくイメージばかりが伴っていましたが、この言葉に出逢えてから、気持ちが変わりました。

もちろん現在の社会状況ですので、何の仕事もせずに、日々好きなことだけをして過ごしていく、という生活はできませんし、もとより望んでもいません。何か自分にできることで、少しでも社会・世の中への御恩返しをしていければとだけ、考えていた時期もありました。

でもそれでは受動的で弱い考え方であることを、「四度目の誕生」の語は、気付かせてくれました。私の場合、「できることを少しでも・・」の考え方の裏に、「できないことは無理をせず」の思いが、宿ってしまっていたのです。「できないこと」を決めるのは、甘さの残る自分自身である、ということに考えが至りました。

これまで着手することのできなかつた事、敬遠していたことにもチャレンジしつつ、自分の新たな可能性を模索する・・・これこそが「四度目の誕生」の意味になるのだと思います。

自分のことばかりで恐縮です。教員生活の最初と最後を、「片柳」で過ごさせていただいたことに、心から感謝いたします。御縁をいただいた方々、いつも豊かな風が漂う地域、素直でたくましい子どもたち・・・私ごとき者にとっても、ここは「ふるさと」になりました。皆様方の御健勝、地域の充実、子どもたちの健やかな成長を、今後もお祈りしております。